

を観察し、次のことを確かめた。染色体数は $n=8$ である。中期染色体は、桿状で、長さ約 $0.4 \mu \sim 0.6 \mu$ 、染色不揃いで、淡染する中位大のもの 1~2 個、濃染する大形のもの 1~2 個を含んでいる。後期染色体は、縦裂と分配に関して、染色体間で遅速がある。嘴状突起を通過して基部娘細胞に移動する娘核は、染色質が凝縮状態である。この娘核は、他の 3 娘核に比べて、染色質の分散が遅れる。

□内田 享 監修：谷津・内田 動物分類名辞典 B5 pp. 1411 18,000 円, 1972, 2 月, 東京, 中山書店。谷津直秀先生の「動物分類表」といえば、動物のいろいろなことを知るのに便利であるのはもちろんだが、谷津先生の創意になる各群の記事が、たいへん楽しいので有名な本であった。初版が大正 3 年 (1914) で、戦後昭和 27 年 (1952) に第 7 版が出たから、大変いきの長い本でもある。それを内田 享氏の監修のもとに、40 人をこえる各部類の専門家が、夫々の得意のところを分担し、なるべく谷津先生の解説を残す一方、分類を最新のものにし、併せて多くの増補を行って、題名と出版所を変えて出版されたのが本書である。内容がたいへん増加され、従って定価も大分高くなったけれども、盛り込まれた内容を考えたら安いものといえよう。

各ページを左右に割り、左側に属までの分類表を、右側にこれに対応する解説や、主な代表種の名と、それに関する興味のある、あるいは重要なデータを書き添えてあり、この中に谷津先生時代のものも含まれている。この分類表が本書の生命であって、苦心の跡がみられる編集で、多勢の書き振りの違う専門家を、制御されるのに大変なことであつたらうとお察した。これだけ一貫して整理されたものは、手近がないから便利この上もなく、座右に置いて大いに重宝している。イリオモテヤマネコ、化石のマチカネワニなどの分類上の位置もわかるなど、新しいデータが十分に入っている。

しかしなんといっても部門によって、人間に対する関係の仕方が違うので、鳥類など、英独仏伊西の呼び名まで入れたが、種名は多くは省いて属のレベルで説明をつけたのに対して、二枚貝のところは各属毎に必ず一種名とその和名だけは欠かさずに挙げるといった様式であったり、原生動物のところは属名と文献を列記したアカデミックな色彩が強く、ミドリムシやラップムシの和名もでて来ないのは、少々統一が悪く不便であると思われた。それに植物と違って群の名は漢字を使ってあるのが多く、たとえば異紐虫類、根口水母類、摂神経類など、いわゆる重箱読みもの、海薔、叉棘、吻蛭、魷竜の各類などは、専門家以外には手がでない。これらはルビをつけて頂きたいし、やさしい漢字の海百合類なども、存外読みが必要なのではないか。それと各属や各属のおおよその大きさとひろがりを添える工夫をしてほしかった。どうも文句をつけすぎるが、便利この上なしの良書故に、醜を得て蜀を望むの思いを諒とされたい。

(前川丈夫)